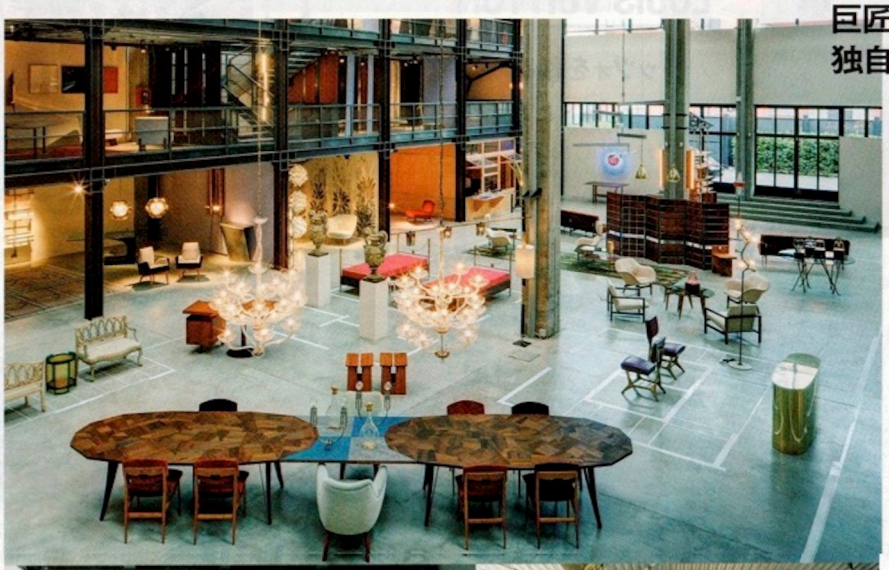
MILANO SALONE 2017

トロ・ミックスの醍醐味

NILUFAR GALLERY/NILUFAR DEPOT

ニルファー・ギャラリー/ニルファー・デポ



PHOTOS BY MATTIA IOTTI

巨匠と新進気鋭の作品を独自の審美眼で融合

さまざまな国籍や年代の家具やオブジェのミックスが独特の世界観を作り出しているのがニルファー・ギャラリー(以下、ギャラリー)だ。『発見』『交差』『創造』をコンセプトに1979年ニナ・ヤシャーが設立。当初はカーペットを中心に扱っていたが、現在ではアート・バーゼルにも出展し、インテリア業界関係者も一目置くギャラリーに。アルネ・ヤコブセンやシャルロット・ペリアンらの家具から、アートやデザインの領域を超えて活動するガンバーやディモーレなど現代のデザイナーやスタジオによる作品を取り扱っている。2015年には、ミラノ郊外に倉庫を改装した3層約1500㎡のニルファー・デポ(以下、デポ)をオープン。ミラノサローネ期間中、ギャラリーではブラジルにおけるモダニスト家具のパイオニアと呼ばれる故ホアキム・テネイロの家具と気鋭のアナスタシアデスによる照明を中心に発表した。デポでは、ジオ・ポンティらによる名作と共に新たにデザインされた約40点の作品をコーナーごとに展示。家具や照明、カーペットや壁紙など、独特のセンスでまとめられた空間は見応えたっぷりだ。ヤシャーは若手をはじめとするさまざまなデザイナーの起用にも積極的で、新たに12人のデザイナーが加わった。

1.デポはミラノのスカラ座をイメージして改装。個性溢れる家具の宝庫だ 2.ジオ・ポンティのアームチェアとマルティノ・ガンバーによるキャビネット 3.エリザベス・ガルーストとマッティア・ボネッティが手掛けたソファ&アームチェア、イラリア・バルディーノ・サルトリによるテーブル、照明は、アナロジア・プロジェクトによるもの

INTERVIEW

制約のない心の底から美しいと思えるデザインが可能

ニナ・ヤシャー/ニルファー・ギャラリー、ニルファー・デポ代表(右) マイケル・アナスタシアデス/デザイナー

スピガ通りのギャラリーでニナ・ヤシャーとマイケル・アナスタシアデスにギャラリーの背景や協業について聞いた。ヤシャーは「最初は家具のことはあまり分からなかった。できるだけ多くのものを見て学んだわ。北欧デザインに魅了されてスウェーデンに行ったとき、アルヴァ・アアルトやヤコブセンなどの名作家具がとても手頃な値段で購入できた。すごくワクワクしたわ」と語る。ヤファーは2007年、イタリア人デザイナーのガンバーと協業をスタート。協業するデザイナーはパトリシア・ウルキオラから新人まで幅広い。アナスタシアデスとのコラボは今回で4度目だ。彼は「初めて色を使ってデザインしたよ。朽ちた真ちゅうの色からヒントを得た。今までとは全く違うアプローチでデザインした。光を祝福するという意味で噴水をイメージしたよ」と話す。彼の作品はラインと幾何学のフォームで構成されるごくミニマルなデザインがほとんど。「この照明は機能性と感情が逆転したようなものだ。通常の照明の構造とは反対で、電球が足になっている。光がメタルの構造を支えているんだ」。電球がフロアにある照明は発想の転換から生まれたようだ。彼は「この照明は相反する状況における調和を生み出す。それがこの作品が奏でる音楽のコントラストだ」と話す。彼はヤシャーと話し合いながらこの照明を完成させた。彼女は「マイケルはとても集中して抑制的なデザインをするけど、今回は少しリラックスした感じね」と言う。彼は、本能的にこのデザインを思いつき、3日でサンプルを完成させたという。『ニナとのクリエイションは、全く制約がなく自由だから、心の底から美しいと思うデザインができる」とアナスタシアデス。若手デザイナーの起用にも積極的なヤシャーに、デザイナーを発掘する方法を聞くと、「口コミがほとんどよ。直感的に誰と組むべきか分かるわ」と軽やかにほほ笑んだ。

噴水をイメージしたアナスタシデアス作の照明

PHOTO BY YASMIN GALATRONI

PROFILE:ヤシャーはイラン・テヘラン生まれ。幼少時にミラノへ移る。1979年にニルファー・ギャラリーを設立。当初は年代物のカーペットを取り扱っていた。89年にギャラリーをスピガ通りに移転。2015年にニルファー・デポをオープン◎アナスタシアデスのプロフィールはP.19参照

MEMO

建築家兼デザイナーのピエロ・リッソーニは、「WWDジャパン」を見て、「ファッションは大好きだよ。いろいろトレンドがあって楽しいし、何でったって、キレイな女の子がいっぱいいるからね」と、いかにもイタリア人らしい一面を見せた。